

何も変わらない夜のはずだった。

「隊長、西端の古い礼拝堂から物音がするって、報告上がってます」  
「またか」

町を警邏していた部下からの報告に、俺はうんざりと溜息をついて立ち上がった。件の礼拝堂は、この王都が建設された頃からあると言われている。

石造りの壁は既に色がくすみ、一部蔦が這っていて不気味なのだが、どういう訳か取り壊されていない。安全上からも放置は良くないと上に報告は上げているのだが、どうにも歯切れの悪い回答だ。

そしてこの礼拝堂には、色々と言われがある。

物音がするはほぼ毎日。妖しげな影がというのも聞くし、その昔、悪戯をした子供が行方不明になった。なんて話もある。

立ち上がった俺は腰に剣を下げて、宿舎を出る。

「隊長が行くんですか？」

「一度確かめに行くだけだ。直ぐ戻る」

「神隠し、気をつけてくださいよ！」

「ばーか！ こんな厳めしい野郎を攫おうなんて奴はいないっての」  
なんて、笑い飛ばしていたのが一時間前の事だった。

なのに――

俺は今、おんぼろ教会の石畳を這いつくばりながら必死に出口へと向かい手を伸ばしている。

闘技大会の常連。鍛え抜かれた体と確かな剣技は近衛騎士にだって引けを取らない。実戦経験も豊富な……っ！

「何なんだこいつは！」

闇より深い黒の世界が、俺の足を掴んでズルズル引きずり込む。

ズズ……ズズ……と体が引きずり込まれるのに抵抗し、石の床に爪を立てるも歯が立たない。爪は剥がれ痛みが走り、それでも俺はお構いなしに藻掻いた。

この得体の知れない何かに捕まったらもう生きては戻れない。そんな予感に臓腑が冷えていくんだ。

そもそも、俺は何に足を掴まれている？ 明確な感触など無いのに、確かに掴まれているのだ。黒い霧が巻き付いているのだ。

正体を確かめようと後ろを振り向いた俺は……そこで、血のように赤い目のようなものが六つ、並んでいるのを見た。

「だ……誰か！ 誰かああ！」

もう外聞なんて気にしていられない。腰抜けと言われてもいい！

足掻き、足を突っ張り腕を伸ばし床に爪を立てる。剣を抜いてそれを床に突き立ててもみた。

だが、無駄だった。

ヒタリ……ヒタリと闇が俺の足首からふくらはぎ、膝裏、太股と上がってくる。その度に俺の体は闇に引っ張り込まれていく。腰に霧が纏わり付いた……その瞬間、俺はブルリと震え、口からは「ひゅっ」という音が漏れた。

冷たい……怖い！

本能的な恐怖だった。それと同時に、俺はもう捕まったんだと悟らされた。

「ああ……ああ！　あああああああ！」

なりふり構わず伸ばした手は届かない。

やがて俺の視界は、純粹な黒に覆われた。



一瞬、意識が途切れた。

次に目を覚ました時、俺は自分がどこにいるのか分からなかった。

そこはとても暗く、何も無い何処か。自分の周囲がなんとなく視認できる程度で、先の方は見えない。

ただなんとなく、平坦なこの暗闇がどこまでも続いているような気がした。周囲を見回しても他に何も無い。

ひとまず起き上がり、体を確かめるが何もない。痛みもなければ服の乱れもない。なんなら剣もそのままだ。

「なんなんだ、ここ」

あの教会には何がいたのか。あれは……確かに人の領域じゃない何かだ。

思いだしてブルリと震え、自分を抱きしめ腕を摩る。込み上げた寒気は生理的な嫌悪か恐怖だろう。

「とにかく、ここに居ても始まらないか」

動けるなら動く。そう決めて数歩踏み出した……その時だった。

突如、俺は何かにつかった。ドン！ という衝撃があったのだ。

目の前にあったのは薄汚れた厚手のローブだった。灰色……だったのだろうか。

色は褪せ、質感はゴワゴワとして悪く、大きく深いフードがある。裾はボロボロにほつれて一部が焼けたような焦げ跡が……っ！

瞬間、俺は後ろに飛び退いて剣を構えた。

見たのだ、そのぼろ切れのようなローブの裾、そこに足がないことを。

「魔物か！」

声を上げ、相手を見据える。

その視線の先で、ソレは確かに振り向いた。

「っ！」

ボロ布のロープの中身は、一際濃い闇。フードの中にも顔などない。ただあるのは血のように赤い、六つの目だった。

「お前が、俺をここに引きずり込んだのか！」

ならばコイツを倒せば元の世界に戻るかもしれない。

俺は呼吸を整え、足腰に神経を集中させ、視線をしっかりと固定して踏み込んだ。長年騎士団で鍛えた剣技、その重みを乗せた一撃は……剣が、真っ二つに折れて終わった。

「……は？」

頭が真っ白になり、折れた剣先が虚空を舞うのを呆然と見ている。

長年共に戦場を渡った相棒だった。

頭二つ分は高い位置から見下ろすそれは、確かに笑った。六つの目を細め、嫌らしく。

「っ！」

ダメだ、これは人が相手できるものじゃない！

背を向けて逃げる俺。だがソレは音もなく俺の目の前に現れた。

黒い闇がロープの下から風切り音をさせて俺の腹にめり込む。鋭利であればこの

一撃で、俺の腹は貫かれていた。

「がはああ！」

衝撃が背骨を軋ませ、内臓を容赦なくひしゃげさせる。せり上がる胃の不快感は嘔吐となつて、闇の中にビチャビチャと飛び散つた。

頭が、グラグラする。倒れそうな俺の体を、そいつはローブの下から伸ばした触手のようなもので絡め取り、釣り上げた。

霞み、ぼやける視界の先でこのローブの化け物俺を見つめ、ニヤニヤと笑つてゐる。そして徐に俺の服に触手をかけると、一気に前を引き裂いた。

「な……」

意図が、分からない……

痛みにズキズキする腹、磨いた厚い胸板を、冷たい触手が撫でていく。案外ベタベタはしてなくて、サラッとしているのに吸い付く感触に背がゾワゾワしている。

ただ……殺意を感じない。

魔物なら、こんな事をせずに殺すはずだ。あいつらは目の前の他種を殺して食う。そういう生き物で、知性はそれほど高くない。

でもこいつは違う。何か、知性を感じる。俺を、値踏みしている。

触手が更に下がって、俺のトラウザーズにかかった。ベルトを器用に外すと、後は脱がせてしまう。上はボロ布状態で腕に引っかかったまま、下半身は綺麗に剥か

れた俺はそれでも、コイツが何をしたいのか分からなかった。

だが、俺はこの時の脳天気さを後悔する。

ローブから出ていた触手の一つがヒュン！と素早く俺の体に伸びて、あろう事か愚息を一息に飲み込んだ。

「んう！」

ヒヤリと冷たいものに萎えた愚息が飲み込まれる、その光景の悍ましさに肌が粟立って、俺は足をバタつかせて暴れた。

だがローブの触手は無数に出てくる。腹に巻き付き、両腕を纏めて頭上で固定し、太股に、足首に巻き付いて、気付けば俺は空中で太股を広げたまま寝そべるような格好にさせられていた。

「止めろ！ 何する！」

声を上げて暴れても触手の拘束は強く、まったく動けない。

その間にも触手に飲み込まれた愚息がゆっくりと、上下に擦られる感覚があった。「あ……？」

意味が、分からない。闇色なのに半透明な触手は俺の愚息を根元まで飲み込み、その中で上下に扱くように動いていた。

違う意味で、俺は焦った。この時ようやく、俺は自分が何をされるのかを知ったのだ。